研究ノート

国際関係論における規範研究の進展

―規範の受容、論争、消滅をめぐる議論を中心に―

阿部悠貴

はじめに

本稿の目的は国際関係論における規範研究がどのように進展してきたのかを概観することである。この研究の初期の段階では主に国家の政策がいかに規範の影響によって形成されているかという点が考察されてきたが、次第に国家は規範をどのように受け入れるのかという動態的な変化に関心が向かっていった。その後、国家が規範を受け入れる際に生じる論争が注目されるようになり、近年では規範への対抗活動、論争を通じた規範の消滅といった新たなテーマが研究されている。本稿はこうした議論の発展過程を考察し、現在いかなる課題が残されているのか検討していく。

一　規範の影響―初期の研究に着目して―

国際関係論の中でも特に規範の役割に注目してきた理論はコンストラクティヴィズムである。ネオリアリズム、ネオリベラリズムという国際関係論の主要な理論とは異なり、コンストラクティヴィズムはアクターの行動は力や利害関係によって決まるのではなく、理念、アイデンティティ、規範といった非物質的・観念的要因によって決定されることを主張してきた。[1]

既に広く指摘されているように（Adler 1997; Finnemore and Sikkink 2000; Hoffmann 2010; Hopf 1998; Hurd 2010; 大矢根 二〇〇五年、大矢根編 二〇一三年、西村 一九九六年、政所・赤星 二〇一七年、渡邉 二〇〇三年）、初期の研究は抽象的な議論に集中していた。国家間に形成されるルールの存在を指摘したフリードリッヒ・クラトチウィル（Kratochwill 1989）、言語行為（speech act）通じて発生する慣習を論じたニコラス・オヌフ（Onuf 1989）、国際政治の構造と行為主体の相互構成、間主観性によって形成される国家間の社会関係に注目したアレクサンダー・ウェント（Wendt 1987, 1992, 1994, 1999）が代表的な研究者として挙げられる。[2]彼らの議論を通じてコンストラクティヴィズムの理論的基盤が形成されていったのであった。

コンストラクティヴィズムの議論が登場した当初は事例研究の不足が指摘されていたが（Copeland 2000; Desch 1998）、徐々にその数も増えていく。例えば国際規範が国家の行動を規定している点を論じた研究（Finnemore 1996, 2003; Hurd 1999; Price 1996; Price and Tannenwald 1996; Reus-Smit 1997; Tannenwald 2007; Zacher 2001）、国内の規範、政治文化、アイデンティティが国家の政策に及ぼす影響を考察した研究（Berger 1998; Duffield 1999; Hopf 2002, 2013; Katzenstein 1996a）、ＮＧＯをはじめとする規範起業家の活動によって規範が形成されることに注目した

研究（Keck and Sikkink 1998; Klotz 1995; Nadelmann 1990; Price 1998; Thomas 2000; 足立 二〇〇四年）などが提示されている。いずれの研究もネオリアリズム、ネオリベラリズムを対抗仮説とし、規範、理念、アイデンティティといった非物質的要因を見なければ国際政治で起きる現象を説明できないことを議論している。[3]

こうした多様な見解が出される中、規範の発展経路を考察した「規範ライフサイクル」モデルがマーサ・フィネモアとキャスリン・シキンクによって提示されている（Finnemore and Sikkink 1998）。これは規範起業家が唱えるアイディアが国内社会で支持を集め、次第に規範として形成されていく段階、次いでその規範を受け入れた国家が他国に働きかけることで国際的に広がっていく段階、そして最終的に国際規範として各国が内面化していく段階を明示したものである。[4] このモデルは規範の生成過程を示す理念型として広く参照されるものとなった。

二　規範の影響からプロセスへ

事例研究の蓄積によりコンストラクティヴィズムの分析視角が定着する一方、次第にこれまでの研究の不備が指摘されていく。初期の研究では国際政治で起きる現象を説明する上で「なぜ規範が重要なのか」という点に関心が向けられてきたが、今度は「どのように規範は重要なのか（How norms matter）」を問うことが必要であると主張されるようになったのである（Kowert and Legro 1996: 325; 他、Checkel 1998: 32, 2001: 557 も参照）。[5] こうしてコンストラクティヴィズムの「第二波（second wave）」（Acharya 2011b: 14; Cortell and Davis 2005: 66; Wiener 2004: 194）の研究が開始される。

（一）説得―学習を通じた変化

第二波の研究がこれまでの議論に向けた批判の一つは行為主体（agency）の欠如である。規範の影響によって国家や個人の行動が決まるとしても、規範はどのように受容されるのか、その動態的な変化が十分に説明されていないと指摘されている。これを明らかにしない限り、個人は規範の影響を行動に移すだけの「運搬人（bearers）」、もしくは盲目的に従う「間抜け（dupes）」となってしまうと批判されたのであった（Barnett 1999: 7; 他、Checkel 1998; Sending 1997; Wiener 2004 も参照）。

この問題意識を背景にして、ジェフリー・チェッケルはアクターが規範を受け入れる過程を考察することが必要であると強く主張していた。彼は国際機関やＮＧＯが規範を受け入れるよう「説得（persuade）」し、その内容を政策決定者が「学習（learn）」することによって規範は浸透し、国家の行動が変化すると論じている（Checkel 2001）。このとき政策決定者は規範の内容をふさわしいものと理解して受け入れるのか、それともＮＧＯや国内社会からの批判を避けるために受け入れるのかという問題がある。チェッケルは損か得かを基準にする合理主義的理解とは異なり、コンストラクティヴィズムの説明は政策決定者が規範の中身をふさわしいと学習する「適切性の論理（logic of appropriateness）」（March and Olsen 1998）に基づくものでなければならないという。彼は二重国籍の付与を事例に、政策決定過程が開かれているドイツでは国内社会からの批判を意識してこの政策が採用されており、したがって合理主義の説明に相当すると述べ、反対に政策決定過程が閉ざされているウクライナではＮＧＯの説得と政策決定者の学習によって二重国籍が認められたといい、コンストラクティヴィズムの説明に該当すると論じている。(6)

チェッケルが示した議論はコンストラクティヴィズムの理解に沿ったものであり、話の筋道として正しいものであろう。しかしその難点は「学習」が個人の頭の中で起きるため、観察できないことである。たとえある人が「学

習した」と言ったとしても、それが本心であるのか、それとも取り繕っているだけなのかを確認することは困難であろう。チェッケルは徹底した調査によって検証可能であると述べているが（Checkel and Moravcsik 2001: 224）、それは研究を行うための方法論であって学習の結果を確認するロジックではない。追跡不可能な領域に主軸を据えることの問題は他の研究者から指摘されており（Adler 20018: 216; Checkel and Moravcsik 2001: 236–237; Hurd 2007: 31; Krebs and Jackson 2007: 40）[7]、この方向において議論が大きく進展することはなかった[8]。

（二）規範の受容

同じ第二波の研究でも、観察可能な領域から規範の受容過程を明らかにしようとする論考も提出されている。アンドリュー・コーテルとジェームズ・デイヴィスは国内政治に注目し、政策決定者が規範を採用するのはそれによる利益を見出せるからであると主張する。例えば湾岸戦争においてアメリカが国連の「集団安全保障」規範を掲げたのは、それにより自らの軍事行動の正統性が高まると考えたからであり、またアメリカの半導体産業が関税及び貿易に関する一般協定（ＧＡＴＴ）の自由貿易規範を持ち出したのは、これを武器に日本の市場開放を迫ることができたからであると論じている（Cortell and Davis 1996, 2005）。彼らはここに規範を受容するアクターの主体性を見ようとしたのである。

また国際規範が受け入れられる条件を探る研究として、国内規範との親和性によって左右されることが議論されている。リチャード・プライスは新しい規範が拡散するかはＮＧＯなどが既存の規範に「接ぎ木（grafting）」できるかという戦略にかかっていると述べ（Price 1998）、セオ・ファレルは、国際規範は自然に伝播するのではなく国内規範と親和性を有するときに「移植（transplantation）」が可能になると論じ、規範が受容される条件を提示して

いる（Farrell 2004）。同様の視点からリサ・サンドストロームはロシアで徴兵制廃止を訴えるＮＧＯのうち、身体への虐待の禁止という国内・国際規範に結び付けて主張したＮＧＯには支持が集まり、他方、平和主義に結び付けたＮＧＯの主張は軍人への敬意というロシア国内で浸透する規範に抵触したため、支持されなかったことを明らかにしている（Sundstrom 2005）。加えてマークス・コーンプロブストは国際規範が浸透するのは受け入れ国が最も大切にしている信条が侵害されないときであると論じている（Kornprobst 2007）。

確かに規範に則した行動が見られるのは国内の政治構造の違いや（Risse-Kappen 1994）、組織文化の特徴（Kier 1999; Legro 1996, 1997）に依存することを指摘した研究は既にあった。しかし第二波の研究はアクターがいかなる意図を持って規範を受け入れるのかという変化に関心を向け、その動態的プロセスを明らかにする点に新しさがあったのである。

こうした関心に基づく研究は広がりを見せている。マティアス・デンビンスキは規範が適用される過程に注目し、二〇一〇年、一一年に起きたコートジボワールとリビアの内戦に対する軍事介入を考察する。この二つの内戦に対して国際社会の軍事介入が許されるかどうかが「保護する責任」という規範に照らして議論されていた。多くのアフリカ諸国は外部からの主権侵害を警戒していたが、この話し合いに十分に参加できたコートジボワールの事例では不満を表明することが少なく、参加できなかったリビアのケースでは反対が強く表明されたことを論じている。この事実に基づき、彼は「手続的正義（procedural justice）」の有無が規範の受容に影響を与えたことを明らかにしている（Dembinski 2016）。[9]

モナ・クルックとジャッキー・トゥルーの研究は、規範は固定化された概念として伝播するのではなく、形成途上（works-in-progress）の過程として広まっていくことを考察している。[10] 彼女たちは規範には曖昧さが含まれて

いるからこそ、各国の状況に応じた解釈を許し、同時に多様なアクターの参加を可能にしているという。そして「言説的アプローチ（discursive approach）」という考えを提唱し、規範起業家はその「内的なダイナミズム」において規範への支持を勝ち取るために聴衆に響く言説に訴え、「外的なダイナミズム」において他の規範に結び付けることで理解を広げようとすると述べている。彼女たちはジェンダーバランスに基づく政策決定の平等性（gender-balanced decision-making equality）とジェンダー主流化（gender mainstreaming）を事例に、それぞれの規範がどのように広がったのかを検討している（Krook and True 2010）。

近年では規範を受容したと「偽る（misrepresent）」ことについての研究も進んでいる。[11] カリサ・クロウォードは女性器切除の禁止、早期婚の禁止を唱えるＮＧＯの活動についてケニアの村落で対照実験を行い、ＮＧＯとの接触が多く、また援助を受けている地域ほど、事実と異なってこれらの慣習を実施していないと偽る回答が見られることを示している（Cloward 2014）。つまり、国際的な接点が多くなるほど批判を避けたいことから正直に答えなくなるのである。そして彼女の著書ではこの研究を掘り下げ、（女性器切除と早期婚といった）ローカルな規範が顕著に確認できる時、現地の人々から反感を買いたくないためＮＧＯはその禁止を唱えることを躊躇する傾向が見られると論じている（Cloward 2016）。これまで圧力や説得によって規範が伝播していくと考えられていたのに対し、クロウォードは受け入れたと偽る理由、また規範起業家であるＮＧＯが実際に面する困難に光を当て、[12] 規範研究の対象を広げている。

これらは限られた例でしかないが、今日、規範の受容については幅広い視点から研究が行われている。

（三）規範が引き起こす論争

第二波の研究が批判したもう一つの点に、既存研究が規範の伝播を単線的に捉えているというものがある（このレビューは政所・赤星 二〇一七年：一五一頁参照）。例えばフィネモアとシキンクの「規範ライフサイクル」モデルはたとえ推進派と反対派の攻防があったとしても、規範は漸進的に拡散する過程を描いていた。これは別の説明にも当てはまり、「スパイラル・モデル」という政府による弾圧、否定、戦術的譲歩、規定的地位として容認、ルールに従った行動の五段階を経て規範が伝播することを考察した視座も、前進後退はあっても規範の発展経路を単一線上で分析していた（Risse, Ropp and Sikkink（eds.）1999）。これに対し第二波の研究は規範が拡散していく過程で規範それ自体が変化すること、論争を引き起こすこと、そしてその論争を通じて新たな規範が誕生することを指摘している。

国際規範がそのままの形で各国に受け入れられるのではなく、現地の文化、規範に合致するよう再構成されると主張したのはアミタフ・アチャリヤである。彼は「現地化（localization）」という概念を提唱し、欧州安全保障協力機構（ＯＳＣＥ）に出自を持つ「共通安全保障（common security）」という規範がアジアでどのように受け入れられたかを考察する。東南アジア諸国連合（ＡＳＥＡＮ）諸国はこの規範を受け入れようとするが、国内の人権状況まで関与する性格を嫌い、内政不干渉を前提とした共通安全保障という理解に変化させていくのであった。これがＡＳＥＡＮ Ｗａｙという規範を形成し、加盟国のアイデンティティの基盤になっていったことを議論している（Acharya 2004; 2011b）。[13]

アチャリヤは次の研究で「規範補完性（norm subsidiarity）」という概念を示し、大国の干渉を嫌う第三世界がこれに対抗する形で別の規範を醸成していったことを議論する。冷戦期、アメリカは「集団防衛」という規範に基づ

き東南アジア条約機構（ＳＥＡＴＯ）を形成するが、東南アジア諸国はアメリカによる干渉を警戒していた。そこで東南アジア諸国は集団防衛という規範を受け入れつつも、一国の意思で介入を行ってはならないという不介入主義を原則とする別の規範を作り出していく。集団防衛の内容にこの規範を補完することによってアメリカに対抗したのであった（Acharya 2011a）。アチャリヤの研究は現地のアジア諸国が新たな規範へと作り変えていくアクターの主体性を明らかにしている。

規範が引き起こす論争（contestation）に焦点を当て、独自の研究を提示してきたのがアンツェ・ウィーナーである。二〇〇四年の論文では論争的受諾（contested compliance）という概念を示し、中東欧諸国が欧州連合（ＥＵ）の規範に抵抗しつつも論争の過程を通じて受け入れていったことを議論し（Wiener 2004）、二〇〇八年の著書ではシェンゲン協定、ＥＵの東方拡大、欧州憲法条約に関し、ロンドン、ベルリン、ブリュッセルの官僚、政治家へのインタビュー調査を通じ、それぞれの見解がいかに異なるのかを明らかにしている。この本の中で彼女は「脱国境化が進んだとしてもすべての分野を包含してはいないため、国際政治はより多様性を帯びることになる。そのため国際的な遭遇の機会は対立、論争を生むことになる」と述べ、国境を越えた規範の伝播が国家間の相違、対立をより浮き彫りにすると指摘している（Wiener 2014: 195）[14]。

二〇一四年の著書では論争についてより詳細な議論を展開する。彼女は論争を「特定の時間と場所に依拠し」「少なくとも二人以上のアクターが」「規範の用いられる意味（meaning-in-use）」の妥当性をめぐって争われるものと定義している（Wiener 2014: 12）。そして規範には三つのタイプがあると述べ、一つ目は国家主権や基本的人権といったメタ・レベルの「根本規範（fundamental norms）」であり、二つ目は条約、合意事項、協定といったミクロ・レベルの「標準化された手続き（standardised procedures）」であるという。この二つはそれぞれが「正しさ」の基準

を掲げているため、両者が対立することで「正統性の乖離（legitimacy gap）」が生まれ（Wiener 2014: 37）、これが論争の原因となるのである。

そして三つ目の規範がこの論争を取り持つ「仲裁規範（intermediary norm）」という性格を有する「組織化された原則（organised principles）」である。例えば「保護する責任」という規範は人道的惨状への対応という「根本規範」と、武力行使を禁止した国連憲章第二条四項という「標準化された手続き」の対立を仲介する「組織化された原則」として誕生した規範であるという。また環境問題においても当てはまり、持続可能な発展という「根本規範」と、具体的な二酸化炭素の排出量に関する取り決めといった「標準化された手続き」の対立を仲裁する規範として「共通だが差異ある責任の原則（ＣＢＤＲ：Common but Differentiated Responsibilities）」という「組織化された原則」が形成されたことをウィーナーは論じている（Wiener 2014: Ch. 6）。

「組織化された原則」は定期的な論争（regular contestations）を抱えているが、そこに多様なアクターの参加を認め、妥協点を探る役割を帯びている。この規範のもと、例えば保護する責任を基盤に内戦にどう対応すべきか、いかなる軍事行動なら許容されるのかが議論され、またＣＢＤＲを基盤に経済発展と環境規制をどう両立させるかといったことが模索されるのである。それゆえ規範の論争は国際問題をいかに統治するかというグローバル・ガバナンスの一形態になっているのである（Wiener 2014: 75）。[15] 異なるレベルで作用する規範の対立に論争の原因を見出し、そこから新たな規範が形成される点を明確にしたことに彼女の貢献を見ることができる。[16]

ウィーナーが複数の規範の相互作用に注目するのに対し、ウェイン・サンドホルツは一つの規範が論争を通じて変質していく点を考察している。彼は戦時下における芸術作品の収奪という規範を取り上げ、昔から存在していたこの規範が時代ごとにどのように変化していったかを検討している。かつて戦勝国が他国の芸術作品を持ち帰るこ

とは当たり前の規範として理解されており、実際、ハーグ条約（一八九九年、一九〇七年）でもこのことが記載されていた。しかし、第一次世界大戦で起きた略奪、特に第二次世界大戦でナチスドイツが行った組織的な略奪をきっかけにして各国から異議が唱えられるようになり、芸術作品の返還が求められるようになっていった。その結果、一九五四年のハーグ条約では芸術作品の略奪が犯罪であると記され、規範の中身が変化していったのであった。さらに今日でも新たな動きが見られ、イラク戦争においてアメリカ軍がバグダッドの博物館に全く手を付けなかったことが暴徒による略奪を招いたため、国家による芸術作品の保護が規範の中身に加わろうとしているとサンドホルツは述べている。

サンドホルツの議論によれば、規範は「規範ライフサイクル」モデルが想定するようなプロセスで段階的に形成され、最後は固定化するのではなく、昔から存在しているが、その中身は疑義が投げかけられるたびに改変していくのである。彼は実施、討議、ルール変更の循環によって規範が発展する「規範変化のサイクル理論（the cycle theory of norm change）」を提示している（Sandholtz 2007, 2008, ならびに Sandholtz and Stiles 2009 も参照）。

（四）規範の伝播に対する対抗活動

規範が常に論争の対象であるとしても、誰がどのように反対するのであろうか。この問題に取り組んだクリフォード・ボブは、ある規範が提唱されると対抗活動（rival activism）が展開されることを指摘する。例えばアメリカで銃規制、同性愛者の権利運動が広がりを見せると、前者に反対する全米ライフル協会（ＮＲＡ）、後者に反対するキリスト教福音主義団体が登場し、時に両者は共闘し、この動きに対抗するのであった。それは国内に留まらず、例えばブラジルでも銃規制が問題なると、ブラジルの団体は全米ライフル協会と連携して対抗活動の国際的ネット

ワークを構築している（Bob 2012）。これまで人権状況の改善や環境問題を掲げるＮＧＯなどの「国境を超える活動家（activists beyond borders）」（Keck and Sikkink 1998）が形成するネットワークが研究されてきたが、これと同じ動きが規範に対抗する組織によって形成されているのである。

アラン・ブルームフィールも同じ関心から研究を行っている。彼は規範起業家（ノルマ・アントレプレナー）（norm entrepreneur）に対抗するアクターを「規範アンチプレナー（norm antipreneur）」と呼び、保護する責任と捕鯨禁止を事例に、これらの規範の広がりを阻止しようとする国家の活動を考察している（Bloomfield 2016）。また足立研幾は薬が安価な値段で貧困地域にも届くよう、国際貿易において医薬品特許を例外にすることを求めるＮＧＯと、それを阻止しようとする製薬会社の対立について検討している（足立 二〇一四年）。ボブとブルームフィールドの研究がある規範に「賛成か反対か」という議論を展開しているのに対し、足立の研究は「医薬品への平等なアクセス」と「知的財産権の保護」という規範同士の対立を考察しており、この点に彼の独自性を見ることができる。[17]

また足立は中世ヨーロッパから今日の時代までに、特定の兵器の使用を禁止しようとするアクターと、それに対抗するアクターの攻防を検討している。彼は前者が既に受け入れられている規範に「接ぎ木」して支持を広げようとするのに対し、後者がその主張を崩そうと「接ぎ木の切断」を行う過程を明らかにし、規範の伝播をめぐる動態を分析している（足立 二〇一五年）。

新たな規範に対抗する活動は現在盛んに研究されており、上記の三名を含む研究者による共同研究も行われている（Bloomfield and Scott（eds.）2017）。

（五）論争を通じた規範の消滅、強化

規範をめぐる論争が研究される一方、論争を通じて規範が消滅する可能性についても議論されている。この研究は理論的な関心から出てきたのはもちろんであるが、現実世界の出来事にも少なからず関係しているようである。それは戦争に関する規範からの逸脱例が多く散見されるようになったことである。

これまで戦時下における捕虜の虐待や拷問、政治指導者の暗殺といったことは規範として禁止されてきた（例えば Thomas 2000）。もしこうしたことが行われれば相手国からも同様の報復を受けるため、国家間の了解に基づき禁止とされてきたのであった。しかし、これらの規範は国家間戦争を想定したものであったため、相手がテロリストとなると捕虜への拷問、暗殺（標的殺害：targeted killing）が近年たびたび繰り返されるようになり、規範からの逸脱、もしくは消滅の可能性が議論されるようになっている（Gross 2010; この他、Banka and Quinn 2018; McKeown 2009; 足立 二〇一五年：二〇五―二〇六頁も参照）。

規範の消滅について、ディアナ・パンケとウルリヒ・ペーターゾーンは逸脱事例が見られた際、力のある国がそれを罰するかどうかに左右されると指摘する（Panke and Petersohn 2011, 2015）[18]。また国際機構を基盤にする規範は疑義が唱えられたとしても再解釈に至ることが多く、そうではない場合は消滅する可能性が高いと論じている（Panke and Petersohn 2015）。

ジェシカ・ベイヤーとステファニー・ホフマンは規範を掲げる動機が消滅に関係していると論じている。同じ「中立政策」という規範を掲げる国でもソ連の脅威という安全保障上の理由から中立を選んだフィンランド、オーストリアは冷戦が終結するとこれを見直す方向に向かい、他方、アイデンティティに基づいて採用したアイルランド、スウェーデンはたとえ冷戦が終結したとしても、中立の方針に変更がないことを考察している。規範を採用する理

由が戦略的か、自発的かによってたどる進路は異なり、これがＥＵの共通安全保障防衛政策に対する態度の違いを形成しているという（Beyer and Hofmann 2011）。

その一方、規範の論争は消滅、弱体化ではなく、むしろ強化に向かうのではないかという見解も出されている。例えばヴィンセント・チャールズ・キーティングはアメリカのジョージ・W・ブッシュ政権がテロ対策の名のもと行った人権侵害により、国際的な人権規範は弱まったのかという問いを挙げる。しかし現実は（普段は人権問題で批判されることの多い）中国、ロシアなどがアメリカを批判する機会としてこれを利用したため、逆に国際人権規範の存在は強調されることになったと述べている（Keating 2014）。[19] またジュッタ・ブルンネーとスティーヴン・トゥープは「自衛権に関する法規範」を考察し、近年、特に「イスラム国」の台頭を機に、テロ攻撃を「止める気もなく、止めることもできない（unwilling and unable）」非国家主体に対しては先制攻撃を許容すべきとの声が上がっていることを指摘する。確かにこれは自衛権に関する法規範を弱体化させる試みではあったが、最終的にこの論争を通じて、相手が非国家主体であろうと武力行使は自衛の時にのみに限られるという考えが再確認され、自衛権に関する法規範は対象を広げて強化されたことを論じている（Brunnée and Toope 2019）。

では論争が起きることで規範は弱体化するのか、それとも強化されるのか、その線引きはどこにあるのだろうか。この点についてニコーレ・ダイテルホフとリスベット・ツィマーマンは論争の内容が「適用をめぐる論争（applicatory contestation）」か、それとも「有効性をめぐる論争（validity contestation）」かによって決まると論じている。「適用をめぐる論争」の場合、ある規範をどのように用いるのかをめぐって議論が展開されるため、規範の強化に通じるといい、他方、「有効性をめぐる論争」は規範が妥当かどうかを問うものであるため、弱体化に向かっていくと述べている（Deitelhoff and Zimmermann 2020; および Deitelhoff and Zimmermann 2019 も参照）。この視点は規範の論

争の行方を示す一つの基準として有益であると思われる。

三　新たな議論の可能性―誰が、なぜ規範に反発するのか―

ここまで国際関係論における規範研究の発展について考察してきた。具体的には規範の受容、その過程で生じる論争、対抗活動、そして規範の消滅の可能性に関する議論に焦点を当ててきた。以下では残された課題について検討してみたい。

（一）論争を引き起こす原因は何か

一点目はなぜある人は規範に反感を覚え、論争を引き起こすのかという点である。上記で見たように、新しい規範が登場すると、それに対抗して（ブルームフィールドの言葉を借りるなら）「アンチプレナー」が登場することが考察されている。しかし、これらの研究で対象となったアクターは従来から反対の立場を取る国、団体であった。例えば銃規制に反対する全米ライフル協会、保護する責任に反対する国、医薬品の知的財産保護を唱える製薬会社といった具合である。したがってある規範についてもともとは賛同していた、もしくは中立の立場を取っていたが、何かをきっかけとして反対するようになった動的な理由が考察されているわけではない。この点を研究することで、なぜある規範は論争を引き起こすのか、また別の規範はそうではないのかということがより明らかになると考える。

この問いに答えるには、規範の性質がどのようなものか考える必要があるのではないだろうか。より正確には妥協を認める余地のある規範か、そうではないかという点であると考える。例えば先に言及したクルックとトゥルー

の研究によれば、（厳格な規定ではなく）曖昧さを残す規範の場合、様々なアクターが参加でき、また多様な解釈も許容されているので規範は浸透しやすいという（Krook and True 2010）。そのため摩擦が生じたとしても、対立するアクター同士が妥協点を探る余地も大きくなるであろう。そのような規範であれば（アチャリヤが述べる）「現地化」も容易になり（Acharya 2004）、また（コーンプロブストの研究が指摘する）核心となる理念が侵害されるのを避け、調整が図られると考えられる（Kornprobst 2007）。

一つの可能性として考えてみるならば、例えば絶対的な主張を唱える環境保護規範（radical environmentalism）は二酸化炭素を排出するあらゆる経済活動を攻撃するため、反発を招くことが予想される。しかし、排出権取引を認めた環境保護規範の場合、それ自体は経済活動との「妥協を強いられた」規範ではあるが、より多くのアクターに受け入れられやすいものとなり、現実的な数値目標を設定した規制が可能になると考えられる。こうした性質が失われるとき、それに反発を覚えるアクターが出てくるのではないだろうか。

規範とは特定の価値に基づき、それに一致しない相手を強く批判するものである。そのため批判された側から強い反発を招く可能性を内包している。妥協を許さない規範であるほど、その分激しい論争に至り、社会的亀裂を生むことになると予想される。今後の研究の課題として規範そのものの性質について検討することが求められていると考える。

（二）論争から妥協点へ

二点目は規範の論争の結果、何らかの解決を見出せる場合とそうではない場合があるが、その基準は何かという課題である。上で考察した研究例においてもこの結末は分かれている。

論争から解決が見出せるもの
アチャリヤ：国際規範と各国が備える政治文化や規範の摩擦は、国際規範が「現地化」されることで解決される。
ウィーナー：メタ・レベルの「根本規範」とミクロ・レベルの「標準化された手続き」の齟齬によって生じる論争は、その間を取り持つ「組織化された原則」という規範が形成されることで調整される。
サンドホルツ：規範に対して疑義が投げかけられると論争が生じ、これを通じて新しい中身へと変化していく。

論争が継続するもの
ボブ／ブルームフィールド：新たな規範とそれに向けられる対抗活動はどちらかが完全に敗北すれば継続する。

未決
足立：推進派、反対派によって「接ぎ木」と「接ぎ木の切断」が繰り返され、どちらが支持を集めるかは一概に言えない。

もちろん、それぞれが取り扱う対象も異なるので、これらの研究をまとめて考察することは不適当なのかもしれない。しかしそうではあるが、論争から新しい展望が開かれる研究と、論争が継続する研究がある以上、その線引きを探ることは検討すべき課題であろう。

その議論の一つして考えられるのが、ダイテルホフとツィマーマンが提唱する「適用をめぐる論争」と「有効性をめぐる論争」の基準である。確かにこれは明快な説明ではあるが、しかしトートロジカルな議論になる可能性がある。そもそも「適用をめぐる論争」の場合、「この規範には意義がある」と考えられているからこそ「どのよう

に適用すべきか」が議論されるのであり、それゆえ有効性が疑われることはないであろう。反対に「有効性をめぐる論争」の場合、「この規範に意義があるのか」ということが問われているのであるから、弱体化するのは必然的なことであろう。したがって、「適用をめぐる論争」が行われるのは適用が問題になっているから、「有効性をめぐる論争」が行われるのは有効性が問題になっているからというトートロジーに陥る危険がある。彼女たちは事例研究として「保護する責任」と「捕鯨禁止」の規範を取り上げているが（Deitelhoff and Zimmermann 2020: 59–70）、適用の手続きや範囲が問われた前者と、この規範の意義が問われた後者では、違うタイプの議論が行われるのは当然の帰結であろう。[20]

このように考えてみると、ここでも規範の性質を検討する必要があるのではないだろうか。つまり、妥協を認める余地のある規範か、そうではないかという点である。ダイテルホフとツィマーマンが取り上げる保護する責任は、ウィーナーによれば人道性といった「根本規範」と、武力行使を禁じた国連憲章第二条四項といった具体的な行動を規制する「標準化された手続き」を調整する「仲裁規範」としての性格を持つという（Wiener 2014: 74–75; 他 Ralph 2018; 政所 二〇二〇年も参照）。それゆえ、保護する責任は異なる主張の妥協点を探る役割を担っているのであるから、その論争は「適用をめぐる」ものとなろう。他方、（彼女らが検討したもう一つの事例である）捕鯨禁止に関する規範は近年、捕鯨そのものを認めないゼロサム的性格を帯びてきているため（例えば阪口 二〇一一年）、捕鯨反対国、推進国が妥協点を見出すことができず、「有効性をめぐる論争」となるのである。その結果、不満を持つ国はこの規範から離れていくことになるのではないだろうか。

妥協の余地のある規範か、それとも妥協を許さないタイプの規範かという点が、規範の論争に関係しているようである。今後の課題として規範の性質に着目した研究が必要であると考える。

おわりに

本稿は国際関係論における規範研究の流れを概観してきた。初期の研究は規範の影響力を論じることに力点が置かれていたが、次第に規範はいかに受容されるのかという議論へと向かっていった。その後、規範は単線的に拡散していくのではなく、その過程において論争が引き起こされる点、対抗活動が展開される点、さらには論争を通じて規範が消滅する可能性も考察されるようになっている。こうした流れを踏まえた上で、本稿は誰が、どのような理由から規範に反発を覚えるようになるのかという点、また論争を引き起こす規範とそうではない規範の違いを検討していくことが今後の課題ではないかと指摘した。

規範は「正しさ」に関する価値を基盤にし、それに則さない行動を強く批判するものである。そのため批判された側からは強い反発を引き起こすことになるのである。新しい規範への対抗活動を考察したボブは「民主主義社会において、係争中の相手は互いに相容れない価値を持って」おり、「相手を見当違い、自分の利益しか考えていない、ペテン、悪そのものと蔑む」と述べている（Bob 2012: 7）。そのため妥協を認める規範もあり、この場合は論争を抱えつつも何らかの解決を見出そうとする試みとして機能している。それゆえ、規範の中身に着目した研究が必要であると考える。

本稿の目的は過去の研究を考察し、国際関係論における規範研究の流れを見出すことであった。可能な限り多くの研究例に言及するよう努めたが、文脈のつながりから含めることのできなかった文献や、考察することのできなかったテーマも存在する。特に現在盛んに議論されている階層性（ヒエラルキー）における規範の役割には触れることができなかった。[21] この研究はアクターが主観的に捉えるヒエラルキーの中で、国家は自らの国際的地位を意識

してどのような行動に出るのかを考察するものである。これは規範の論争を新たに発展させるものであると考える。この点について今後改めて検討したい。

注

（1）本稿は多くの研究に倣い、「特定のアイデンティティを共有するアクターにとっての適切な行動基準」（Katzenstein 1996b:5）という規範の定義を採用している。

（2）この三名の議論をまとめたものでは Zehfuss 2002: 10–22; 重政 二〇〇六年参照。

（3）コンストラクティヴィズムの研究に限らないが、アイディアが政策決定に及ぼす影響を考察したものでは Goldstein and Keohane（eds.）1993 を参照。

（4）他、規範の漸進的な伝播を説明するスパイラル・モデルなども提唱されている（Risse, Ropp and Sikkink（eds.）1999）。これについては後ほど言及する。

（5）この過程において、実証主義を採用する伝統的コンストラクティヴィズム（conventional constructivism）と、それに反対するポストモダン・コンストラクティヴィズム（postmodern constructivism）に分岐していく（Hurd 2010: 306–308. ならびに Wendt 1998 も参照）。本稿でコンストラクティヴィズムと言及するのは前者の伝統的コンストラクティヴィズムを指している。この立場については Checkel 1998: 327; Farrell 2002: 51–58; Hopf 1998: 182; Jepperson, Wendt and Katzenstein 1996: 67 参照。

（6）同じ関心に基づいたものでは Gheciu 2005; Payne 2001 がある。

（7）この点に関しては阿部 二〇一一年参照。

（8）新たな可能性としてニコーレ・ダイテルホフは説得が経験的に追跡不可能なものであると認めた上で、説得が行われたならば確認できるであろう証拠を集め、他の説明と比較検討することで、因果関係を確立しようとしている。彼女は国際刑事裁判所の設立を事例に、大国（特にアメリカ）が反対していたとしても、賛同国、ＮＧＯがその設立のために制度的、規範

的条件を整えていったことで、大国の利益が説得によって変化したことを論じている（Deitelhoff 2009）。

（9）「保護する責任」が国際規範として定着する点に関しては政所 二〇二〇年参照。デンビンスキの議論に関連して、参加という手続きが国際的な正統性の概念の構成することを指摘した Jason and Gallagher 2015 も参照。

（10）様々なアクターが参加して規範を作り上げていくという視点は三浦（二〇〇五年）が早い段階から指摘していた。またこの視点は「実践（practice）」を通じて規範が定着し、共通のアイデンティティが形成されていく点を論じた Adler and Pouliot (eds.) 2011 にも関連する部分がある。

（11）この他、Seymour 2013 も参照。

（12）国際機関といった「関与する側」の視点に注目したものには、例えば国際選挙監視団が客観的に成功とは言えない選挙であっても、援助国に民主化の失敗を見せたくない、また選挙の不正を糾弾すれば、結果に不満を持つ勢力を後押し、内戦を再発させる懸念から高評価を下す傾向があることを指摘した研究（Kelley 2009）、平和維持活動職員が持つ認識が現地で必要な対応の判断を見誤らせることを考察した研究（Autesserre 2009）がある。類似した視点から、シャーリ・カーペンターはＮＧＯの内部で取り上げられるテーマ、取り上げられないテーマが選択され、それが国際的な規範の潮流に影響を及ぼしていることを考察している（Carpenter 2007）。この他、Barnett and Finnemore 2004 も参照。

（13）アチャリヤとは異なり、ＡＳＥＡＮ Ｗａｙは他国に国内問題を干渉させないための建前として誕生したと考える見解もある（湯川 二〇〇九年）。

（14）類似した視点として van Kersbergen and Verbeek 2007 参照。この論文は新しい規範が成立してもその理解は各国で異なり、運用をめぐって対立が生じていくことを明らかにしている。

（15）ウィーナーは二〇一八年の著書では不利益を被る個人（affected stakeholders）のミクロ・レベルの訴えが、メゾ・レベルの「組織化された原則」で議論され、マクロ・レベルの「根本規範」が作り変えられていくプロセスを考察し、「サイクル・グリッド（cycle-grid）」モデルという考えを提唱している（その内容は次に議論するサンドホルツの理解に近い）。

(16) この他、この研究に関係した視点として、筆者は内戦への軍事介入を事例に、人道的惨状に対応すべきという「人道性規範」、軍事力の使用を控えるべきという「武力行使禁止規範」、一般市民、介入国兵士を危険に晒すべきではないという「人的被害ゼロ（zero-casualty）規範」といった異なる規範の要請が引き起こす「規範のジレンマ」を考察し、これを避けようとすることが予防外交に向けた国際機構の改革を促進するという研究を行ったことがある（Abe 2019）。

(17) このような規範を援用することで自らの主張を正当化することを考察した点は、Hurd 2007; Schimmelfennig 2003 に通じるものがある。また規範の衝突に着目した大矢根 二〇〇五年も参照。

(18) 規範の存続と力の関係は指摘されており、例えば de Nevers 2007 参照。加えて経済的に依存する国は、相手国のジェンダー規範に合わせて女性の大使を送る傾向があること、また国力が増大するにつれ、（それまで相手国に配慮して守っていた）ジェンダー規範を軽視するようになることを分析した研究もある（Jacob, Scherpereel and Adams 2017）。

(19) この他、ベッシー・ジョーズはアメリカがテロリストに対する標的殺害を容認する国際規範を形成しようとしたことに対し、ヒューマンライツ・ウォッチ（ＨＲＷ）が「規範抑制者（norm suppressor）」としてこの試みを阻止するキャンペーンを展開したことを考察している（Jose 2017）。ただしこの研究は見方を変えれば、ＨＲＷが従来の「暗殺禁止」規範を推進する規範起業家であり、アメリカがそれに対抗する「抑制者」と捉えることもできるので、ジョーズの提示する概念はもう少し精緻化が必要ではないかと思われる。

(20) ダイテルホフとツィマーマンは「適用をめぐる論争」が何度も繰り返されると、次第に「有効性をめぐる論争」へと変質すると述べている。しかし、そうであるならば、なぜ適用をめぐる話し合いで合意が得られない状況が続くのか、その対立の原因を明らかにしなければならないであろう。それは規範の内容が妥協的か、非妥協的かという点に関係しているのではないだろうか。

(21) 例えば Towns 2010; Zarakol（ed.）2017 参照。なお階層性の議論はアプローチを問わず今日の国際関係論において広く議論されている。例えば Bially Mattern and Zarakol 2016; Lake 2009; Renshon 2017; Towns and Rumelili 2017 参照。

参考文献

阿部悠貴「国際政治における『変化』をめぐるコンストラクティヴィズムの議論―『結果の論理』と『適切性の論理』の対立から融合へ―」『政経研究』第九七号、二〇一一年、九七―一〇八頁。
足立研幾『オタワプロセス　対人地雷禁止レジームの形成』有信堂高文社、二〇〇四年。
――「新たな規範の伝播失敗―規範起業家と規範守護者の相互作用から―」『国際政治』第一七六号、二〇一四年、一―一三頁。
――『国際政治と規範　国際社会の発展と兵器使用をめぐる規範の変容』有信堂高文社、二〇一五年
大矢根聡「コンストラクティヴィズムの視座と分析―規範の衝突・調整の実証的分析へ―」『国際政治』第一四三号、二〇〇五年、一二四―一四〇頁。
大矢根聡編『コンストラクティヴィズムの国際関係論』有斐閣、二〇一三年。
阪口功「ＩＷＣレジームの変容―活動家型ＮＧＯの戦略と規範の受容プロセス―」『国際政治』第一五三号、二〇〇八年、四二―五七頁。
重政公一「国際関係理論におけるコンストラクティヴィスト・アプローチの再評価―メタ理論からみたウェント、オヌフ、クラトクウィルの論考を中心に―」『名古屋商科大学論集』第五〇号第二巻、二〇〇六年、七一―八六頁。
西村めぐみ「規範と国家行動―コンストラクティヴィズムをめぐる理論的一考察」『一橋論叢』第一一六巻第一号、一九九六年、一二三―一四一頁。
政所大輔『保護する責任　変容する主権と人道の国際規範』勁草書房、二〇二〇年。

政所大輔、赤星聖「コンストラクティビズム研究の先端―規範のライフサイクル・モデルを越えて―」『神戸法学雑誌』第六七巻第二号、二〇一七年、一四七―一七八頁。

三浦聡「複合規範の分散革新―オープンソースとしての企業の社会的責任（ＣＳＲ）―」『国際政治』第一四三号、二〇〇五年、九二―一〇五頁。

湯川拓「ＡＳＥＡＮ研究におけるコンストラクティヴィズム的理解の再検討―『ＡＳＥＡＮ Ｗａｙ』概念の出自から―」『国際政治』第一五六号、二〇〇九年、五五―六八頁。

渡邉智明「研究諸事例におけるコンストラクティビズム―方法論としての可能性―」『九大法学』第八六号、二〇〇三年、三四一―三六四頁。

Abe, Yuki 2019. *Norm Dilemmas in Humanitarian Intervention: How Bosnia Changed NATO*, London: Routledge.

Acharya, Amitav 2004. 'How Ideas Spread: Whose Norms Matter? Norm Localization and Institutional Change in Asian Regionalism', *International Organization* 58（2）: 239–275.

2011a. 'Norm Subsidiarity and Regional Orders: Sovereignty, Regionalism, and Rule-Making in the Third World', *International Studies Quarterly* 55（1）: 95–123.

2011b. *Whose Ideas Matter?: Agency and Power in Asian Regionalism*, Ithaca: Cornell University Press.

Adler, Emanuel 1997. 'Seizing the Middle Ground: Constructivism in World Politics', *European Journal of International Relations* 3（3）: 319–363.

Adler, Emanuel and Pouliot, Vincent（eds.）2011. *International Practices*, Cambridge: Cambridge University Press.

Autesserre, Séverine 2009. ‘Hobbes and the Congo: Frames, Local Violence, and International Intervention’, *International Organization* 63（2）: 249–280.

Banka, Andris and Quinn, Adam 2018. ‘Killing Norms Softly: US Targeted Killing, Quasi-secrecy and the Assassination Ban’, *Security Studies* 27（4）: 665–703.

Barnett, Michael 1999. ‘Culture, Strategy and Foreign Policy Change: Israel’s Road to Oslo’, *European Journal of International Relations* 5（1）: 5–36.

Barnett, Michael and Finnemore, Martha 2004. *Rules for the World: International Organizations in Global Politics*, Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.

Berger, Thomas U. 1998. *Cultures of Antimilitarism: National Security in Germany and Japan*, Baltimore, Md.: The Johns Hopkins University Press.

Beyer, Jesscia L. and Hofmann, Stephanie C. 2011. ‘Varieties of Neutrality: Norm Revision and Decline’, *Cooperation and Conflict* 46（3）: 285–311.

Bially Mattern, Janice and Zarakol, Ayşe 2016. Hierarchies in World Politics, *International Organization* 70（3）: 623–654.

Bloomfield, Alan 2016. ‘Norm Antipreneurs and Theorising Resistance to Normative Change’, *Review of International Studies* 42（2）: 310–333.

Bloomfield, Alan and Scott, Shirley V.（eds.）2017. *Norm Antipreneurs and the Politics of Resistance to Global Normative Change*, London: Routledge.

Bob, Clifford 2012. *The Global Right Wing and the Clash of World Politics*, New York: Cambridge University Press.

Brunnée, Jutta and Toope, Stephen J. 2019. 'Norm Robustness and Contestation in International Law: Self-Defence against Non-State Actors', *Journal of Global Security Studies* 4（1）: 73–87.

Carpenter, R. Charli 2007. 'Setting the Advocacy Agenda: Theorizing Issue Emergence and Nonemergence in Transnational Advocacy Networks', *International Studies Quarterly* 51（1）: 99–120.

Checkel, Jeffrey T. 1998. 'The Constructivist Turn in International Relations Theory', *World Politics* 50（2）: 324–348.

2001. 'Why Comply? Social Learning and European Identity Change', *International Organization* 55（3）: 553–588.

Checkel, Jeffrey T. and Moravcsik, Andrew 2001. 'A Constructivist Research Program in EU Studies?', *European Union Politics* 2（2）: 219–249.

Cloward, Karisa 2014. 'False Commitments: Local Misrepresentation and the International Norms against FGM and Early Marriage', *International Organization* 68（3）: 495–526.

2016. *When Norms Collide: Local Responses to Activism against Female Genital Mutilation and Early Marriage*, New York: Oxford University Press.

Copeland, Dale C. 2000. 'The Constructivist Challenge to Structural Realism', *International Security* 25（2）: 187–212.

Cortell, Andrew P. and Davis, James W. Jr. 1996. 'How Do International Institutions Matter? The Domestic Impact of International Rules and Norms', *International Studies Quarterly* 40（4）: 451–478.

2005. 'When Norms Clash: International Norms, Domestic Practices, and Japan's Internalisation of the GATT/WTO', *Review of International Studies* 31（1）: 3–25.

de Nevers, Renee 2007. 'Imposing International Norms: Great Powers and Norm Enforcement', *International Studies Review* 9

(1): 53-80.

Deitelhoff, Nicole 2009. 'The Discursive Process of Legalization: Charting Islands of Persuasion in the ICC Case', *International Organization* 63 (1): 33-65.

Deitelhoff, Nicole and Zimmermann, Lisbeth 2019. 'Norms under Challenge: Unpacking the Dynamics of Norm Robustness', *Journal of Global Security Studies* 4 (1): 2-17.

2020 'Things We Lost in the Fire: How Different Types of Contestation Affect the Robustness of International Norms', *International Studies Review* 22 (1): 51-76.

Dembinski, Matthias 2016. 'Procedural Justice and Global Order: Explaining African Reaction to the Application of Global Protection Norms', *European Journal of International Relations* 23 (4): 809-832.

Desch, Michael C. 1999. 'Culture Clash: Assessing the Importance of Ideas in Security Studies', *International Security* 23 (1): 141-170.

Duffield, John S. 1999. 'Political Culture and State Behavior: Why Germany Confounds Neorealism', *International Organization* 53 (4): 765-803.

Farrell, Theo 2001. 'Transnational Norms and Military Development: Constructing Ireland's Professional Army', *European Journal of International Relations* 7 (1): 63-102.

2002. 'Constructivist Security Studies: Portrait of a Research Program', *International Studies Review* 4 (1): 49-72.

Finnemore, Martha 1996. *National Interests in International Society*, Ithaca: Cornell University Press.

2003. *The Purpose of Intervention: Changing Beliefs about the Use of Force*, Ithaca: Cornell University Press.

Finnemore, Martha and Sikkink, Kathryn 1998. ‘International Norm Dynamics and Political Change’, *International Organization* 52（4）: 887–917.

2001. ‘Taking Stock: The Constructivist Research Program in International Relations and Comparative Politics’, *Annual Review of Political Science* 4: 391–416.

Gheciu, Alexandra 2005. *NATO in the “New Europe”: The Politics of International Socialization After the Cold War*, Stanford, California: Stanford University Press.

Goldstein, Judith and Keohane, Robert O.（eds.）1993. *Ideas and Foreign Policy: Beliefs, Institutions, and Political Change*, Ithaca: Cornell University Press.

Gross, Michael L. *Moral Dilemmas of Modern War: Torture, Assassination, and Blackmail in an Age of Asymmetric Conflict*, Cambridge: Cambridge University Press, 2010.

Hoffmann, Matthew J. 2010. ‘Norms and Social Constructivism in International Relations’, *Oxford Research Encyclopedia of International Studies*. https://oxfordre.com/internationalstudies/view/10.1093/acrefore/9780190846626.001.0001/acrefore-9780190846626-e-60（二〇二〇年八月、最終アクセス）

Hopf, Ted 1998. ‘The Promise of Constructivism in International Relations Theory’, *International Security* 23（1）: 171–200.

2002. *Social Construction of International Politics: Identities & Foreign Policies, Moscow, 1955 and 1999*, Ithaca: Cornell University Press.

2013. ‘Common-sense Constructivism and Hegemony in World Politics’, *International Organization* 67（2）: 317–354.

Hurd, Ian 1999. ‘Legitimacy and Authority in International Politics’, *International Organization* 53（2）: 379–408.

2007. *After Anarchy: Legitimacy and Power in the United Nations Security Council*, Princeton, N.J.: Princeton University Press.

2010. 'Constructivism', in Reus-Smit, Christian and Snidal, Duncan（eds.）, *The Oxford Handbook of International Relations*, Oxford: Oxford University Press: 298–316.

Jacob, Suraj, Scherpereel, John A. and Adams, Melinda 2017. 'Will Rising Powers Undermine Global Norms? The Case of Gender-Balanced Decision-Making', *European Journal of International Relations* 23（4）: 780–808.

Jason, Ralph and Gallagher, Adrian 2015. 'Legitimacy Faultlines in International Society: The Responsibility to Protect and Prosecute After Libya', *Review of International Studies* 41（3）: 553–573.

Jepperson, Ronald L., Wendt, Alexander and Katzenstein, Peter J. 1996. 'Norms, Identity, and Culture in National Security', in Peter J. Katzenstein（ed.）*The Culture of National Security: Norms and Identity in World Politics*, New York: Columbia University Press: 31–75.

Jose, Betcy 2017. 'Not Completely the New Normal: How Human Rights Watch Tried to Suppress the Targeted Killing Norm', *Contemporary Security Policy* 38（2）: 237–259.

Katzenstein, Peter J. 1996a, *Cultural Norms and National Security: Police and Military in Postwar Japan*, Ithaca: Cornell University Press.

1996b. 'Introduction: Alternative Perspectives on National Security', in Peter J. Katzenstein（ed.）*The Culture of National Security: Norms and Identity in World Politics*, New York: Columbia University Press: 1–32.

Keating, Vincent Charles 2014. 'Contesting the International Illegitimacy of Torture: The Bush Administration's Failure to

Legitimate Its Preferences within International Society', *British Journal of Politics and International Relations* 16（1）: 1–27.

Keck, Margaret and Sikkink, Kathryn 1998. *Activists beyond Borders: Advocacy Networks in International Politics*, Ithaca: Cornell University Press.

Kelley, Judith 2009. 'D-Minus Elections: The Politics and Norms of International Election Observation', *International Organization* 63（4）: 765–787.

Kier, Elizabeth 1999. *Imagining War: French and British Military Doctrine Between the Wars*, Princeton, N.J.: Princeton University Press.

Klotz, Audie 1995. *Norms in International Relations: The Struggle against Apartheid*, Ithaca, NY: Cornell University Press.

Kornprobst, Markus 2007. 'Argumentation and Compromise: Ireland's Selection of the Territorial Status Quo Norm', *International Organization* 61（1）: 69–98.

Kowert, Paul and Legro, Jeffrey 1996. 'Norms, Identity, and Their Limits: A Theoretical Reprise', in Peter J. Katzenstein（ed.）*The Culture of National Security: Norms and Identity in World Politics*, New York: Columbia University Press: 451–497.

Kratochwil, Friedrich 1986. *Rules, Norms, and Decisions: on the Conditions of Practical and Legal Reasoning in International Relations and Domestic Affairs*, Cambridge: Cambridge University Press.

Krebs, Ronald R. and Jackson, Patrick Thaddeus 2007. 'Twisting Tongues and Twisting Arms: The Power of Political Rhetoric', *European Journal of International Relations* 13（1）: 35–66.

Krook, Mona Lena and True, Jacqui 2012. 'Rethinking the Life Cycles of International Norms: The United Nations and the Global Promotion of Gender Equality', *European Journal of International Relations* 18 (1): 103–127.

Lake, David A. 2011. *Hierarchy in International Relations*, Ithaca: Cornell University Press.

Legro, Jeffrey W. 1996. 'Culture and Preferences in the International Cooperation Two-Step', *American Political Science Review* 90 (1): 118–137.

1997. 'Which Norms Matter? Revisiting the "Failure" of Internationalism', *International Organization* 51 (1): 31–63.

March, James G. and Olsen, Johan P. 1998. 'The Institutional Dynamics of International Political Orders', *International Organization* 52 (4): 943–969.

McKeown, Ryder 2009. 'Norm Regress: US Revisionism and the Slow Death of the Torture Norm', *International Relations* 23 (1): 5–25.

Nadelmann, Ethan A. 1990. 'Global Prohibition Regimes: The Evolution of Norms in International Society', *International Organization* 44 (4): 479–526.

Onuf, Nicholas Greenwood 1989. *World of Our Making: Rules and Rule in Social Theory and International Relations*, Columbia: University of South Carolina Press.

Panke, Diana and Petersohn, Ulrich 2012. 'Why International Norms Disappear Sometimes', *European Journal of International Relations* 18 (4): 719–742.

2016. 'Norm Challenges and Norm Death: The Inexplicable?', *Cooperation and Conflict* 51 (1): 3–19.

Payne, Rodger A. 2001. 'Persuasion, Frames and Norm Construction', *European Journal of International Relations* 7 (1): 37–

61.

Price, Richard M. 1997. *The Chemical Weapons Taboo*, Ithaca: Cornell University Press.

1998. 'Reversing the Gun Sights: Transnational Civil Society Targets Land Mines', *International Organization* 52（3）: 613–644.

Price, Richard M. and Tannenwald, Nina 1996. 'Norms and Deterrence: The Nuclear and Chemical Weapons Taboos', in Peter. J. Katzenstein（ed.）*The Culture of National Security: Norms and Identity in World Politics*, New York: Columbia University Press: 114–152.

Ralph, Jason 2018. 'What Should Be Done? Pragmatic Constructivist Ethics and the Responsibility to Protect', *International Organization* 72（1）: 173–203.

Renshon, Jonathan 2017. *Fighting For Status: Hierarchy and Conflict in World Politics*, Princeton, N.J.: Princeton University Press.

Reus-Smit, Christian 1997. 'The Constitutional Structure of International Society and the Nature of Fundamental Institutions', *International Organization* 51（4）: 555–589.

Risse-Kappen, Thomas 1994. 'Ideas Do Not Float Freely: Transnational Coalitions, Domestic Structures, and the End of the Cold War', *International Organization* 48（2）: 185–214.

Risse, Thomas, Stephen C., Ropp and Sikkink, Kathryn（eds.）1999. *The Power of Human Rights: International Norms and Domestic Change*, Cambridge: Cambridge University.

Sandholtz, Wayne 2007. *Prohibiting Plunder: How Norms Change*, New York: Oxford University Press.

2008. ‘Dynamics of International Norm Change: Rules against Wartime Plunder’, *European Journal of International Relations* 14（1）: 101–131.

Sandholtz, Wayne and Stiles, Kendall 2009. *International Norms and Cycles of Change*, Oxford: Oxford University Press.

Schimmelfennig, Frank 2003. *The EU, NATO and the Integration of Europe: Rules and Rhetoric*, Cambridge: Cambridge University Press.

Sending, Ole Jacob 2002. ‘Constitution, Choice and Change: Problems with the “Logic of Appropriateness” and Its Use in Constructivist Theory’, *European Journal of International Relations* 8（4）: 443–470.

Seymour, Lee J. M. 2013. ‘Let’s Bullshit! Arguing, Bargaining and Dissembling Over Darfur,’ *European Journal of International Relations* 20（3）: 571–595.

Sundstrom, Lisa McIntosh 2005. ‘Foreign Assistance, International Norms, and Civil Society Development: Lessons from the Russian Campaign’, *International Organization* 59（2）: 419–449.

Tannenwald, Nina 2007. *The Nuclear Taboo: the United States and the Non-Use of Nuclear Weapons Since 1945*, Cambridge: Cambridge University Press.

Thomas, Ward 2000. ‘Norms and Security: The Case of International Assassination’, *International Security* 25（1）: 105–133.

Towns, Ann E. 2010. *Women and States: Norms and Hierarchies in International Society*, Cambridge: Cambridge University Press.

Towns, Ann E. and Rumelili, Bahar 2017. ‘Taking the Pressure: Unpacking the Relation between Norms, Social Hierarchies, and Social Pressures on States’, *European Journal of International Relations* 23（4）: 756–779.

van Kersbergen, Kees and Verbeek, Bertjan 2007. 'The Politics of International Norms Subsidiarity and the Imperfect Competence Regime of the European Union', *European Journal of International Relations* 13（2）: 217–238.

Wendt, Alexander 1987. 'The Agent-Structure Problem in International Relations Theory', *International Organization*, 41（3）: 335–370.

1992. 'Anarchy is What States Make of It: The Social Construction of Power Politics', *International Organization* 46（2）: 391–425.

1994. 'Collective Identity Formation and the International State', *American Political Science Review* 88（2）: 384–396.

1998. 'On constitution and Causation in International Relations', *Review of International Studies* 24（Special Issue）: 101–117.

1999. *Social Theory of International Politics*, Cambridge: Cambridge University Press.

Wiener, Antje 2004. 'Contested Compliance: Interventions on the Normative Structure of World Politics', *European Journal of International Relations* 10（2）: 189–234.

2008. *The Invisible Constitution of Politics: Contested Norms and International Encounters*, Cambridge: Cambridge University Press.

2014. *A Theory of Contestation*, Heidelberg: Springer.

2018. *Contestation and Constitution of Norms in Global International Relations*, Cambridge: Cambridge University Press.

Zacher, Mark W. 2001. 'The Territorial Integrity Norm: International Boundaries and the Use of Force', *International Organization* 55（2）: 215–250.

Zarakol, Ayşe（ed.）2017. *Hierarchies in World Politics*, Cambridge: Cambridge University Press.
Zehfuss, Maja 2002. *Constructivism in International Relations: the Politics of Reality*, Cambridge: Cambridge University Press.

本稿はＪＳＰＳ科研費（課題番号：１９Ｋ０１５２７）の研究成果の一部である。